

新

歌人群像

會津八一

● 頂点を極めた歌人

● 原田 清 ●



● 多芸に秀でる

會津八一あいつやいちは近代のすぐれた歌人で書家、また東洋美術史家、教育者という多面的存在で、そのいづれにおいても超一流であった。大和・奈良の風光、古寺・古仏を詠出した短歌は、万葉以来類を見ない古今きんりつに屹立し、異彩を放つ。ゆったりとした、粘りのある調べ、澄明な抒情じょうじょう、その純日本語の美しさは祈りにも似た清浄感と存在の孤愁を覚えさせる。静かに幾度か繰り返し読み返す時、深く心に沁みしみて、揺曳し、時に蘇りよみがえ、反芻はんじうされよう。

くわんおんのしろきひたひにやうらく
のかげうごかしてかせわたるみゆ

観音の白き額に環珞やうらくの影動かして風わたる見
ゆ

はつなつのかぜとなりぬとみほとけは
をゆびのうれにほのしらすらし

初夏の風となりぬとみ仏はを指のうれにほの
知らすらし

ちかづきてあふぎみれどもみほとけの
みそなはすともあらぬさびしさ

近づきて仰ぎ見れどもみ仏のみそなはすとも
あらぬ淋しさ

八一は表記を「かな」のみに終始した。歌

はもと声によりうたわれたもので、耳で聞いて解るものでなければとの強い主張による。

書家としても独自の鍛錬を重ねた。古今の名筆の臨書を拒否し、文字の構成を分析、縦線と横線、それに曲線を練習の基本に据えて、明朝体活字を手本にした。そして自ずからの個性の展開を待った。

東洋美術史家としては『法隆寺、法起寺、法輪寺建立年代の研究』で学位を得、教育者としては実学実物主義を主張。年来の収集癖と相まって、教育上必要な美術品収集にも心魂を傾けた。今日、それらの美術品は東京の早稲田大学會津八一記念博物館に収められ、一般公開されている。また新潟市の會津八一

記念館には、八一の書作品を中心に愛用の文房四宝や生活の調度品が展示されている。

学規四則

さて八一は、一八八一（明治十四）年八月一日に新潟市の中心地、古町通りの料亭會津屋の次男として生まれた。八月一日生まれゆえに八一。後年、号して八朔、八朔郎とも称した。別号、秋艸道人、渾齋。

一八九五（同二十八）年、新潟県尋常中学校に入学、一九〇〇（同三十三）年卒業。十代後半、正岡子規に傾倒、俳句、短歌を作り、「東北日報」「新潟日報」に発表、二十代そこで俳句の選者となり、多くの俳論を連載、早熟の才をほしいままにした。

一九〇二（同三十五）年、早稲田大学に入学、坪内逍遙の薫陶を受ける。生涯の師であった。卒業後、新潟の有恒学舎に英語教師として就任、後、早稲田中学に移る。

学規四則を子弟に示し、自ら実践の指針とした。

- 一、深くこの生を愛すべし
- 一、省みて己を知るべし
- 一、学芸を以て性を養ふべし
- 一、日々新面目あるべし

簡潔で深く、人生の真を捉え、詩の一篇、哲理の一章と読むこともできよう。

歌集『南京新唱』が編まれたのは一九二四（大正十三）年、四十四歳の年であった。早熟の才子も、実にゆつたりとした歩みである。古代憧憬の心と仏教美術研究の過程に、大和路で、口頭に繰り返して詠み据えたものである。他の近代の歌人と異なり、極めて寡作と言えよう。

おほらかにもろてのゆびをひらかせて

おほきほとけはあまたらしたり

おほらかに両手の指を開かせて大ききはあまたらしたり

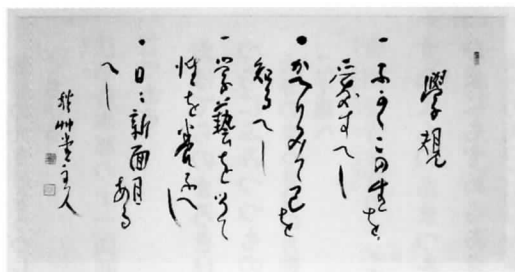
東大寺の大仏を詠出。「あまたらしたり」は、天地空間に充ち充ちているというほどの意味。「たらす」は「足る」。

びるばくしやまゆねよせたるまなざしをまなこにみつあぎののをゆく

毘楼博又まゆね寄せたるまなざしを眼に見つつ秋の野を行く

東大寺戒壇院の広目天。「びるばくしや」は広目天のサンスクリッドの漢字音写。「びるばくしや」と詠んだことに、この作品の命がある。

ふぢはらのおほきさきさをうつしみにあひみるごとくあかきくちびる



秋艸道人（會津八一）書の「学規」の額装



新潟の書店、青山堂で、娘の蘭子と（1951年）

藤原の大き后をうつしみに相見るごとく赤きくちびる

法華寺本尊の十一面観音。人口に膾炙した一首である。

おほてらのまろきはしらのつきかけを
つちにふみつつものをこそおもへ

大寺のまろき柱の月影を土に踏みつつものをこそ思へ

唐招提寺金堂のエンタシスの柱。

するえんのあまつをとめがころもでの
ひまにもすめるあきのそらかな

水煙の天つ乙女が衣手のひまにも澄める秋の空かな

葉師寺東塔。

あめつちにわれひとりゐてたつごとき
このさびしさをきみはほほゑむ

天地にわれ一人ゐて立つごときこの淋しさを
君はほほゑむ

夢殿の救世観音。短歌の最も純粹で高度な作品である。

他の作品に移る。秋艸堂と名づけた武蔵野の面影の残る居処の歌。「村莊雜事」から。

ののとりにはのをさきにかよひきて
あさるあのとのかそけくもあるか

野の鳥の庭の小笹にかよひ来てあさる足音の
かそけくもあるか

むさしののくさにとばしむらさめの
いやしくしくにくるあきかな

武蔵野の草にとばしむらさめのいやしくしくに
暮るる秋かな

天折の天才画家、中村彝は病床にあつて「体が急に寒くなり、血圧の高まるのを覚えます」と激賞の書簡を寄せている。

不朽の歌集

しかし八一が歌人として世に認められるのはなお後、一九四〇（昭和十五年）年、六十歳の還暦に『南京新唱』の作品も含む全歌集として出版された『鹿鳴集』であった。たちま

ち版を重ね、一躍、八一の歌人としての地位を不動のものとした。

あせたるをひとはよしとふびんばくわ
のほとけのくちはもゆべきものを

褪せたるを人は良しとふ頻婆果の仏の口は燃ゆべきものを

「びんばくわ」はインドの果物で赤い色の比喩。先の法華寺の十二面観音を想起させる。

せきばくとひはせうだいのこんだうの
のきのくまよりくれわたりゆく

寂寞と日は招提の金堂の軒の隈より暮れわた
りゆく

「せうだい」は唐招提寺。

時代は激変して、戦火は大陸から太平洋に及ぶ。多くの子弟が学半ばに戦場に赴いた。

繊細端麗な短歌作品からは想像できないデモニーシユ（悪魔的）な性格を八一は持っていた。激怒・激昂すると自己抑制を失った。弟子達はわきまえて、二、三年静まるのを待った。去る者もあつたであろう。多くのエピソードを残す。『鹿鳴集』の成功と、六十歳の年齢にもよろう。

唯一の短歌の弟子、吉野秀雄に案内され榛名（群馬県）に遊んだ。その作品を冒頭に一九四四（昭和十九）年、第二歌集『山光集』が編まれた。



吉野秀雄は若くして『南京新唱』の作品に触れ、感激、八一を訪れて弟子入りをするのだが、八一の態度は取りつくすべもないほどにけんもほろろであったようだ。しかし後に現代を代表する歌人に成長する器として大きかった。誠実に従って、師弟を超える信頼厚い文芸の同志の關係にまでなる。前夫人の挽歌、また故八木重吉夫人との再婚の歌など、記念すべき作品を残す。作品は省略。

さて、『山光集』であるが、出版と同時に多くを焼失、時代とはいえ、書物も運命を持つ。いでたたむわくごがともどこえくればかはなみしろしもみぢちりつつ
出で立たむ若子が友と越え来れば川波白しもみぢ散りつつ

一九四三(昭和十八)年、戦場に赴く学生をつれて大和の地を研修旅行した折の作品。旅中、過労により倒れ、以後、半年にわたって病臥。

むかしひとこゑもほがらにたくうちて
とかししおもわみえきたるかも
昔人声もほがらに卓うちて説かしし面輪見え
来たるかも

「むかしひと」は坪内逍遙をさす。病後、早大のキャンパスに立つての作。戦火はたちまち本土に及ぶ。一九四五(昭和二十)年四月、秋艸堂は焼失。万巻の書物、数々の収集品のことごとくが灰燼に帰した。病の重い養女きい子を伴い、身ひとつ、新潟に避難。間もなく、八一の生活を支えてきたきい子を失う。挽歌「山鳩」「観音堂」は、その長文の詞書と共に戦後文学の頂点をなし、文学史に残る作品である。

やまばとのとよもすやどのしづもりに
なれはもゆくかねむるごとくに
山鳩のとよもす宿のしづもりに汝はも逝くか
眠るごとくに

ひとのよにひとなきごとくたかぶれる
まづしきわれをまもりこしかも
人の世に人なきごとく高ぶれる貧しきわれを
守り来しかも

ひそみきてたがうつかねぞさよふけて
ほとけもゆめにいりたまふころ
ひそみ来て誰が打つ鐘ぞさ夜ふけて仏も夢に
入り給ふころ

これらの作品を載せる『寒燈集』は、一九四七(昭和二十二)年刊行。以後、作歌活動はほとんど終息。

きい子亡き後、従姉妹、中山後郎の娘、蘭子が家事を見る。後、養女。八一の終焉を看取ることになる。この年の秋、昭和天皇が新潟地方を巡幸された。八一は小杉放庵、相馬御風と良寛について進講の予定になっていたが、実現を見なかった。八一の関心は書に集中していた。書が日展五科として参加が決定、審査員の話が持ち上がったが、反対者があつて消える。それに対抗して、新宿・中村屋で個展、「林下十年の夢 湖辺一笑新」の対聯は日展全作品を凌駕するとの評を得た。短歌最後の作品は香川県の五剣山八栗寺の鐘銘。
わたつみのそこゆくをのひれにさへ
ひびけこのかねのりのみために
わたつみの底ゆく魚の鱗にさへ響けこの鐘法
のみために
一九五六(昭和三十一年)十一月二十一日、死去。

(はらだ・きよし「槻の木」)

※掲載短歌には、筆者直訳の漢字・仮名まじりの書き下し文を付加しました。